



東京多摩プロバスニュース

第 50 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行：広報委員会 2013. 9. 4.

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

コミュニティプロバス…わが街・多摩を次世代へ

第 10 期 定期総会、第 109 回 定例会

日 時：平成 25 年 7 月 3 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：京王クラブ 2F 会議室

出席者：27 名(会員数 35 名)

第 110 回 定例会

日 時：平成 25 年 8 月 7 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：29 名(会員数 35 名)

理 念

1. 豊かな人生経験を生かして地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする

◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

10 周年に際して

先ず、今年度のスローガンについて。われわれがこの多摩でプロバスクラブを立ち上げ、これまで様々な活動ができたのは、多摩という地域社会があるからにほかなりません。活動の原点はコミュニティだという意味で、頭に「コミュニティプロバス」と謳いました。そして、われわれが「コミュニティプロバス」として、何が次世代に残せるかを考えた時、単なるモノではない！われわれがこの街で過している共通の時間の証として、「わが街・多摩を次世代へ」残すことだ！と考えました。これは、自分達の街を誇りに思う意識の問題です。街は時間の集積によって創られていきます。5 周年はく美しい多摩を次世代へとし、次世代に残したいく多摩の風景＞というテーマで公募美術展を行いました。10 周年の今年はスローガンに相応しいくわが街・多摩＞の街起こしカルタ、即ちご当地カルタをわれわれ会員自らの手で、互いに汗を流して作ろうというわけです。自分達の手で作るという事にこだわりたい！従ってそのプロセスを大事にしたいと考えています。われわれの経験と知恵を結集すれば、必ず面白いカルタができるはず。乞うご期待！

会長 増山敏夫



清涼感漂う深緑のモミジバフウ並木(多摩市鶴牧 6 丁目)

日常の活動としては、各委員会で魅力的な企画を練っていただき、定例会を含めた会員の親睦、交流の更なる活性化を図っていきたいと考えています。サークル活動については、最近やや低調ですが、皆で活性化の知恵をしばって行きたいと思っています。

また、前年度から始まった、同じ多摩地域の八王子、日野プロバスとの同好会・卓話などの交流は、より密なるものにしていければと考えています。定年後の人生を意味あるものにしようとするプロバスです。互いに刺激し合い、健康であること！よろしくお願いします。

第 10 期定期総会(平成 25 年度)が 7 月 3 日(水) 午後 1 時 30 分～3 時、京王クラブ 2F 会議室で開催された。議事内容にのっとり、要約して報告する。

中村昭夫会長の開会挨拶後、関根正敏幹事の司会で議長に西村政見会員、書記に倉賀野武士会員を選出、議事録署名人に中村会長・堀内陽二並びに小西加葉子会員が選任された。

次いで、西村議長が会則 11 条 3 項により総会成立を確認(議決権所有会員 35 名、出席 27 名、委任状 5 名)し、議長の議事進行による審議がなされ、第 1 号議案から第 7 号議案まですべて承認された。

第 1 号議案 平成 24 年度(第 9 期)活動報告

1. 総括報告 中村昭夫会長

「キャリアと特技を活かし、次の世代に引き継ごう」をスローガンとして、会員間の親睦活動と社会奉仕活動の両面の充実を強化促進し、会員がプロバスライフを楽しみ、社会奉仕活動に取り組んでいけるよう目指した結果、理事会および 4 委員会とも基本目標を体して活発に活動され、大きな成果を収めた。

特に①会友制度創設 ②10 周年記念事業 PJ 発足 ③ESD 教育支援 ④近隣プロバスクラブとの交流 ⑤関東中央地区交流会の開催(2 月当クラブがホストを担当、全日本プロバス・八王子・日野・四街道・埼玉浮き城・横濱・鎌倉・多摩各 PC より計 76 名の参加) ⑥中学生俳句大会への支援 ⑦広報活動の充実 などである。

2. 委員会活動報告

1) 総務委員会 北村克彦委員長

- ①会員状況；入会者 2 名、退会者 2 名、会員数 35 名
- ②定例会；年間 12 回開催し、講話(4 回)、卓話(4 回)、座談会(2 回)、特別企画(2 回)を開催。特に八王子 PC との交換卓話や昼食会付きなどの新たな企画に取り組んだ。

2) 研修・親睦委員会 上田清委員長

- ①日帰り研修旅行を横浜地区で 5 月に実施
- ②立川防災館見学会を 10 月に開催
- ③森永工場見学と花見散策(昭和記念公園)を 4 月開催
- ④紅葉の高尾山ハイキングを 11 月に開催
- ⑤その他；7 月総会後に懇親会、12 月に忘年会を開催

3) 地域奉仕委員会 滝川道子委員長

- ①国士舘大学で「江戸しぐさ」を講演、並びに多摩中学で「貝合わせ」の伝統文化継承授業を実施。
- ②プロバス寺子屋活動(学校教育支援)；「そろばん授業」小学生対象に全 6 回と「教養マナー授業」を永山高校で 3 回実施。
- ③「日本の伝統文化サロン」を志学サロンで 5 回開催。
- ④マイツリー計画に今年も参加

4) 広報委員会 稲田興委員長

会報「東京多摩プロバスニュース」を隔月で計 6 回発行。ホームページも隔月で更新。アクセス数は月百件を超えている。

3. 創立 10 周年記念事業企画プロジェクト

大澤亘リーダー

合計 7 回の会議を開き、事業内容を企画立案し、4 月理事会・5 月定例会で概要を説明。式典・祝賀会、記念行事、広報活動、夫々を各委員会に引き継いだ。

第 2 号議案 平成 24 年度会計決算・備品目録

山田正司会計

第 3 号議案 平成 24 年度監査報告

大澤亘監査

第 4 号議案 平成 25 年度 理事選出

会長	増山 敏夫
副会長(会長エレクト)	山田 正司
幹事	北村 克彦
会計	藤寄 喬子
総務委員会委員長	神谷 真一
研修・親睦委員会委員長	上田 清
地域奉仕委員会委員長	大澤 亘



新任の理事：左から中村監査・上田研修親睦委員長・平田広報委員長・神谷総務委員長・増山会長・山田副会長・藤寄会計・北村幹事・大澤地域奉仕委員長 各位
広報委員会委員長 平田 哲郎

第 5 号議案 平成 25 年度(第 10 期)活動計画

1. 基本目標と活動方針 増山敏夫会長

<スローガン>

“コミュニティプロバス…わが街・多摩を次世代へ”

1) 基本目標

<わが街・多摩>この愛すべき地域に根ざしたコミュニティークラブとして魅力溢れるプロバスライフを目指す

2) 活動方針

- ①定例会の更なる活性化と充実を図る(企画、運営)
- ②10 周年記念事業の実施
- ③ESD プログラムへの教育支援活動の具体化
- ④近隣プロバスクラブとの連携・交流活動の推進
- ⑤サークル活動の活性化、近隣クラブとの交流

2. 委員会の活動計画

1) 総務委員会

神谷真一委員長

幹事とともに当クラブの運営に関する庶務的事項と組織の潤滑剤として、各委員会間の連携をはかるため

◇◇◇ 第 10 回定期総会(つづき) ◇◇◇

次の活動を行う。

- ①定例会の開催 ②卓話・講話・座談会
③10 周年記念行事への協力 ④他団体との協働事業

2) 研修・親睦委員会

上田清委員長

会員の自己研鑽と相互理解を図ることを目的として、次の活動計画を推進する。

- ①研修計画;ウォーキング(自然観察・名所旧跡探訪等)・工場等の社会見学(サントリー・国立印刷所等)・研修旅行・その他
②親睦計画;お花見・親睦会(昼食会・懇親会・忘年会)・プロバス間の交流・その他

3) 地域奉仕委員会

大澤亘委員長

豊かな知識と経験をもとに多摩市が推進する ESD に協力してその具体化に努力する。また、創立 10 周年記念事業の一つとして関戸公民館との共催による市民企画講座の実現を図るほか、他団体との協働による取り組みを試行する。

- ①多摩市 ESD への協力;そろばん教室・国際理解授業・伝統文化サロンなどの出前授業・裁判員制度・ユネスコスクール活動など
②市民企画講座の実施;平成 25 年度後期募集に応募
③環境問題への貢献を目指した活動
④他団体との協働;伝統文化サロンなど

4) 広報委員会

平田哲郎委員長

定期的会報の発行を中心に、ホームページの運営を含

め、当クラブの広報活動にあたる。会員相互の交流を情報面で支援し、プロバス活動の活性化を図ると共に、外部に当クラブの活動を積極的に発信していく。

- ①会報の編集、発行、配布 ②ホームページの編集と管理 ③創立 10 周年記念事業の広報活動

第 6 号議案 平成 25 年度会計予算 藤崎喬子会計

第 7 号議案 会則の一部改定「会友」 関根正敏幹事

以上 7 議案共に異議なく承認され、午後 3 時総会を終了。



「懇親会」参加者一同

7 月 3 日(水) 京王クラブで恒例の懇親会が開催され、ロータリークラブから会長の志村光明様・幹事の小暮知則様を来賓に迎えて総勢 29 名が親交を深めた。

この懇親会は前役員の慰労を兼ねて定期総会日に行なっているもので、会員の酒量・食欲ともに益々旺盛・健在?にて、遅くまでカラオケ三昧の楽しい時間を送ることができた。また、このたびの総会において「会友制度」が設けられたことから、こうした懇親会等が旧知の親交を温める良い機会となるよう期待している。

◇◇◇ 幹事・委員会報告 ◇◇◇

1. 幹事報告

北村克彦幹事

1) 全日本プロバス協議会関連

- ①年会費 3000 円を納入。
②クラブ運営に関するアンケートを 9 月末までに提出要請があり、各委員会案を 8 月の理事会でまとめて、提出する。

2) 会友について

会友該当者に往復はがきで意向を打診する。一方、会則並びに運営細則の改訂版を全員に配布する予定。

2. 総務委員会報告

神谷真一委員長

1) 7 月度定例会(7 月 4 日)

新委員会毎の名札替えと席替えを実施。瀬尾会員による卓話「あの日あの頃」を実施。 関連記事 P4 参照

2) 8 月度定例会(8 月 7 日)

「多摩カルタ」について、山田会員より投稿の状況報告と出席会員による各自 45 句以内の選別作業を実施。

3. 研修・親睦委員会報告

上田清委員長

- 1) 7 月 3 日(水) 懇親会を開催

上記参照

- 2) 今秋に計画している社会見学やウォーキング事業については、9 月の定例会で案内を行う予定。

4. 地域奉仕委員会

大澤亘委員長

- 1) 創立 10 周年記念事業のひとつであり、かつ、関戸公民館との共催事業として計画した首都直下地震に関する講演会の講師には、東大名誉教授瀬川爾朗氏を予定している。

- 2) 多摩ボランティア・市民活動支援センターの主催、国士舘大学の協力による「災害時身近にできる応急措置」の学習会が 7 月 17 日、唐木田の多摩市総合福祉センターで開催され、当委員会メンバー 4 名が参加。

5. 広報委員会報告

平田哲郎委員長

- 1) 9 月 4 日発行予定のプロバスニュース 50 号の編集計画を立案し、8 月 7 日(水)原稿の執筆を依頼した。
2) 今 10 期のスタート月となるので、ホームページの全面的更新作業を行い、7 月 24 日に更新公開を行った。

あの日あの頃

瀬尾日出男会員

昭和35年(1960年)は、終戦から15年が過ぎ、混乱期から高度経済成長期へ突入した時期と言えます。国民にとって、楽しみとは何かを見つけた時ではないでしょうか。

まず、スポーツ界の当時の国民の楽しみのひとつの大相撲では、江戸っ子力士の栃錦 VS 土俵の鬼の若乃花、両横綱の活躍が多くの人達に感動を与え、その後柏戸 VS 大鵬へと引き継がれ相撲人気をゆるぎないものとした。また、新しくスポーツとして登場したプロレスでは、力道山の空手チョップに歓喜し、混乱していた時代に何か明るいニュースを待っていた国民は、ラジオ全盛時代ではあったが、街頭テレビに群がり興奮していた。

また、当時の野球と言えば、プロを凌ぐ人気の六大学野球全盛期で、長嶋、杉浦など多くのスターを輩出し、取り分け35年の秋の早慶戦は、優勝の雌雄を決するゲームが一週間も続き、連日6万人の観衆が神宮の森を埋め尽くした。世に言う“早慶6連戦のドラマ”と呼ばれている。

特に安藤投手(早大)の5連投の超人的な活躍は、今も



熱く語る瀬尾会員

語り草として記憶に残る話題を提供した。

当時のスポーツ界以外に目を向けると、昭和35年の国内事情は、国論

を二分した60年安保闘争の激化による国会デモ、岸内閣退陣後の池田内閣による所得倍増計画の発表、東京オリンピックに向けての高速道路の整備、東海道新幹線の開通と、一気に高度経済成長となり、アジアで初めての東京オリンピックが昭和39年に開催され、昭和45年の大阪万博でその頂点を極めることとなった。

このように時代の推移を見た時に、政治、経済、スポーツなど、昭和35年は、国としてかつてない程の激しい年であり、戦後の「ターニングポイント」と呼べるのではないのでしょうか。

◆◆◆ 委員会活動 ◆◆◆

志学サロン第八回「濃茶のいただき方」

森川静子会員

第七回「薄茶のいただき方」に引き続き6月28日「濃茶のいただき方」を指導致しました。

和室の床に裏千家14代淡々斎筆「白雲

自去来」のお軸を掲げ、花入の「せせらぎ籠」に、花は自宅の庭の「矢筈ススキ」と白の「木槿」を入れ、香合は11代玄々斎お好み写「あまおぶね」を設えました。

参加者は14名で皆さん真剣に取り組んでおりました。通常お稽古は先ず薄茶を完全にマスターした後、濃茶の

お稽古に入ることになります。

点前も客作法も違います。濃茶の茶葉は薄茶と違い茶畑に覆いを掛け、苦味の少ない茶葉に仕上げます。また、濃茶の1人分の茶の量は薄茶の約二倍の量を使い、薄茶は泡を立てて点てますが、濃茶は熱い少量の湯をそそぎ、ゆっくりとだまのできぬよう、香高く練ります。薄茶は一客一碗に対して、濃茶は一碗を数名で三口半ずついただき、手渡しでお隣の人にお廻しします。主菓子・濃茶のいただき方、茶碗のぬぐい方などの所作を実際に行って頂きました。

普段口にすることが少ない濃茶に挑戦し、苦いと顔をしかめる人、思ったより美味しいですとにっこりする人、反応は様々でしたが、前回にも説明した「和敬清寂」の茶の心を、少しでも深く理解して下さったら嬉しいなと感じた一日でした。

◆◆◆ ハッピーバースデー ◆◆◆



誕生日を迎えられました。

写真左：左から7月誕生の

鈴木泰弘・滝川道子・西村政晃会員

写真右：左から8月誕生の

阪東照子・瀬尾日出男・上田清会員



**私の貴重な一葉の写真****池田寛会員**

私の自宅のリビングルームのピアノの上に一葉の古びた額入りの写真が飾られています。生前、外務省欧州担当の外交官であった父、池田勲の遺品の一つです。

私の生まれた大正13年頃、父は母と乳飲み子を佐賀の唐津に残して、単身イタリアローマ市に日本大使館員として約5年間駐在しました。

その間、父は週末には国内を旅行し古代ローマ帝国の史跡を探訪し、さらに隣国ドイツ、スイス、オーストリア、エジプトまで足をのばし、フランスではセーナ川のほとりで、パリジェンヌと腕を組み、高級バー、クラブではブランデーを掌で温めるなど、数多くの著名人と親交を深めたようです。中でもイタリアの有力な政治家であり、詩人として、また有名な小説“死の勝利”の著者として知られるダヌンチオ氏のご長男とは特に深交がありました。

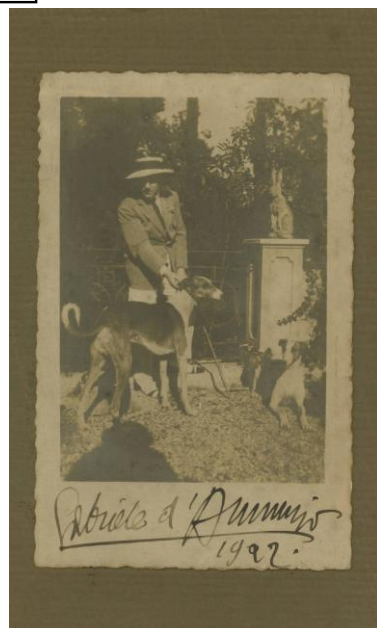
5年間の駐在を経て帰国命令でイタリアを離れる時、ダヌンチオ氏のご長男から友情の記念として父ダヌンチオ氏の写真を贈られました。この写真の箱書きとして次のような父の手紙が残されています。

「この写真は昭和4年伊太利国を去る際ダヌンチオ氏のご長男から戴く。ダヌンチオ氏は大の写真嫌いであるが、この世に

残した写真は非常に少なく、この写真はおそらく数百万円の価値がある」と記されています。

私としては、写真の価値の真偽を確かめたいと思っております。因みに、ガブリエーレ・ダヌンチオ氏(1863～1938)はイタリアの国民的英雄と称され、政治的にはファシスト運動の先駆者として、詩人、作家としても高名で、1938年逝去に際してムッソリーニはその死を悼み国葬で送りました。

また、その著名な作品として知られる“死の勝利”は、後に三島由紀夫がそれを下敷きに『岬にての物語』を書いたことでも知られています。



ガブリエーレ・ダヌンチオ氏のサイン入りの写真

◇◇◇ 私と多摩ニュータウン(8) ◇◇◇**私の多摩ニュータウン****大澤亘会員**

私が多摩市に転居してきたのは昭和51年3月(1976年)である。それまでは戦時中の学童疎開で1年半を栃木県のお寺で集団生活を送ったことと、終戦後、中学の1年半を家族の疎開先の千葉県で過ごしたことを除けば、小学校から大学卒業まで、さらにその後のサラリーマン時代も、地方への転勤を経験しなかったもので、39年間をまるまる東京で生活したことになる。生まれは今の新宿区で、その後住居は中野、杉並、練馬と変わったが、山手線以西が主な生活圏であった。

終の棲家として多摩市を選んだのは、当時の日本住宅公団が募集した分譲住宅優先購入権付きの住宅債券を購入したからである。抽選に極端に弱い我が家では、5年間一定の金額を積み立てれば、必ず公団の分譲住宅を購入できるというこの制度は願ってもないものだった。

この地に引っ越した当初は、京王線と小田急線がやっと多摩センターまで延長されたばかりで、駅前にはバスターミナルしかなく、駅と我が家の間は宅地造成中の荒野をバスで往来した。日野市に住んでいた会社の先輩から「君の家の近くを車で通ったら狐が歩いていたよ」と言われたこともあった。当時の私にとって多摩市は文字通りベッドタウンで、早朝1時間半かけて都心のオフィスに向かい、夜

遅く帰宅するや食事と入浴・就寝の生活であったからあまり不便さを感じる暇もなかった。

平成7年(1995年)に会社を退職し、第二の人生が始まりしばらくは平穏な生活を楽しんだが、このような時期に市内のある知人から新設される当クラブへの加入を勧められた。今にして思えば、私がこれから多摩市中心の生活をするにあたっては、地元知人・友人のいるほうが良いだろうというその方の配慮だったに違いない。お陰様で多士済々の会員の皆さんはじめ、クラブの活動を通じて市内外の多くの方々と知り合うことができた。

一方で開発以来手がけられた市内の環境整備が進み、また民間マンションの新設が増えたこともあって、若い世代の転入が目立つこの頃である。「住民は高齢化し建物は老朽化したオールドタウン」という誤った認識はぜひ改めさせたいものである。リニューアルの槌音も響いている。



リニューアルが始まった多摩ニュータウン



伊勢の遷宮に寄せて

阪東熙子会員

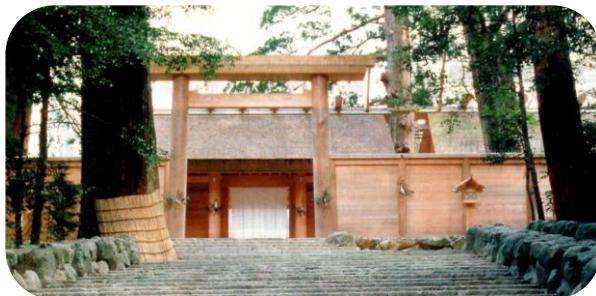
今秋 10 月 11 日 内宮神楽殿の官休庵奉仕による献茶式が、神宮茶室饗膳所で拝服席が設けられるとのご案内をいただいたのをきっかけに、改めて遷宮について心を留めた。

まず、何故に多くの人手と財を費やし、20 年毎に寸分違わぬ正殿を直ぐ隣の敷地に新築し、遷渡という大神事を執り行うのか？そして、伝えねばならないのか？思うに、一つは耐用年数に係わらず神道の精神に基づき、「汚れ即ち気枯れを忌嫌い『常若』を望み、活力ある神力を次世代に繋げる」という信念の発露ではなかろうか。又一つは、日本古来の弥生建築の様式と、それに伴う工芸技術の保持継承。更には信仰意識の結束による神事祭事継承などが要因に挙げられるのではなかろうか。

ドイツのブルーノー・タウト氏の著書「日本美の再発見」の中で、世界に誇れる日本建築の最たる建物として、内宮外宮を掲げていると聞く。萱葺屋根、塗装せずの白木を、大地に突き刺す掘立柱等あえて老朽化の早い殿堂を 1300 年もの長きに渡り伝承しえたのには、綿密に考慮され尽くされたシステムの存在があったからだ。その時代の第一級の棟梁、工芸の匠、職人がその実物を手掛けた技の持ち主で、マニュアルによらぬ生の最高技術を、次世代の担い手である後継者に直に伝授できた。

新調するのは宝殿鳥居、三重の御垣神官の装束神宝敷物織布一切で、あらゆる分野が厳しく伝えられる結果と

なった。また祭典行事は 20 以上も行われるが、中でも「お木曳き」「お白石持」には「一日神領民」と成り全国から白衣で参詣する。その数は 61 回白石持では 21 万人にも及んだ。神事参加のエネルギーは今も昔も変わらぬようだ。この二つの祭事は、国選択無形民俗文化財に指定されている。内宮は天照大御神、外宮は豊受大御神が祀られていることは、誰でも知るところだが、勤労感謝の日が豊受大御神の関係する新嘗祭であったことは、昔話となりそう。



日本人の総氏神が祭られる皇大神宮・内宮

神武、綏靖、安寧、臺徳、孝昭、孝安…と推古天皇まで歴代の名を唱えても「だからどうなの」と訝しがられる昨今だ。信仰心はそれぞれとしても、お伊勢さんと親しまれた昔の弥次喜多スタイルで、広大な神苑の緑を吸い、宮社 125 社の祭事が年中何処かで営まれる伊勢を、観光するのも一興ではないだろうか。西行法師の「何ごとのおわしますかは知らねども、忝さに、涙こぼるる」にあやかり、畏敬の念をもって玉砂利を踏みしめたい。

◇◇◇東京多摩プロバスソング◇◇◇

作詞 池田 寛
作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて
緑の杜に囲まれた 我が故郷の行く末と
社会奉仕に力をそそぐ
集う我等プロバスクラブ

プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

霊峰富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の
教え導く糧となる

集う我等プロバスクラブ

プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ



編集後記



本誌プロバスニュースも節目の第 50 号を送り出すことができました。平成 17 年 2 月第 1 号を発行以来 8 年 6 ケ月、優れた知性とたゆまぬ努力で紙面の向上を進められた先輩会員に改めて敬意を表するものです。

また、今夏の厳しい異常気象の中で寄稿いただいた会員の方々のご協力にも改めてお礼申し上げます。

本号の巻頭言で増山会長は「コミュニティプロバス」というコンセプトでクラブ活動の活性化を打ち出され、最長老の池田会員からは「私の一品」としてご父君が残された貴重な写真を提供いただき、阪東会員からは「伊勢遷宮」について神事参加のエネルギーに関し特別寄稿いただき、また、大澤会員は「私の多摩ニュータウン」で、終の棲み家として多摩市を選ばれた事情に触れられ、瀬尾会員からは「あの日あの頃」で、昭和 30 年代での思い出をくすぐる懐かしい話題を提供いただくなど、感謝！

(広報委員長 平田哲郎)